うきたむ

第48号
2016.12.1

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高畠町大字安久津 2117　TEL 0238 － 52 － 2585
FAX 0238 － 52 － 4665
URL http://ukitamu.pupu.jp/

▲修復作業中の岡田氏

▲修復された玉龍院五百羅漢像

最近嬉しかったこと
～五百羅漢像の修復事業から～

高畠町教育委員会　井田 秀和

高畠町で最初の町指定文化財である「五百羅漢像」の修理事業が始まった。文化から天保にかけて製作された木彫のお像である。個々のお像には、程度の差こそあれ時間の経過や置かれた環境による劣化が見られ、新潟地震によってその多くが破損したが、これまで本格的な修理修復は行われてこなかった。さらに、記憶に新しい東日本大震災による被害もあり、各方面からの助成を得ながら、修理修復を行うこととなったものである。

修復作業は、一般社団法人　木文研（代表理事　岡田　靖氏）によって十一月七日から十七日まで行われた。終了日の前日、修理の現場となっているお寺さんを偶々訪れた時、岡田さんは外で休憩しておられた。そして、私の顔を見るなり「とうとう見つけましたよ。」と興奮気味に言われたのである。

五百羅漢像の製作者については、ある人物名が伝承されているが、その人物については何の情報もなく、その存在についても疑義がもたれるものであった。数年前に五百羅漢像の悉皆調査を行っている岡田さんは、当初よりある著名な仏師、あるいはその一門の作ではないかと考えられており、今回お像一体々々を詳細に調査する中で、仏師名の記載がないかと期待されていたが、仏師名どころか一文字の墨書もなく、少々がっかりされていた。修復期間中、二人で五百羅漢像と同時期にお寺に納められた他の木像を見て回った時、このお像のこの部分に仏師名があるはずだと言われていた、まさにその場所に仏師の名を記した墨書を発見したということである。記されていた場所、仏師名ともに岡田さんが思い描いていたとおりになったのだから、それはもう嬉しかったに違いない。見つけましたよと言われた時の満面に浮かぶ笑顔がそれを物語っていたし、私自身も本当にワクワクした瞬間であった。

実は、五百羅漢像の謎はこればかりではない。下世話な話だが、相当に高価なものであったに違いない五百羅漢像の購入に際し、一体誰が資金を出したのか、そしてそれはいくらだったのか。現在五百羅漢像が安置されている羅漢堂が建設されるまで、どこに保管されていたのか。これほどのお像が遠く京都より運ばれてきたこの一大事について、おそらく近郷近在の村々へ瞬く間に話は広まったと思われるが、文書等の記録が未だ発見できないのは何故か。謎はつきないのである。

今回発見されたのは僅か数行の墨書ではあるが、そこに記されている文字の持つ意味は極めて大きい。今後修理修復作業が進められる中で、新たな発見があることを期待したいし、『何故』に対する答えがどこかに必ずあると信じたい。

企画展講演会

森と暮せば～縄文人の植物利用～

「縄文人がつくったふるさとの森」

平成28年11月13日（日）

今年度は鈴木三男先生の「縄文人がつくったふるさとの森」の演題で企画展講演会が開催されました。

最初に、押出遺跡と小山崎遺跡の植生環境がどのようなものであったのを、お話ししていただきました。縄文時代の柱や杭材は圧倒的にクリが多いのだが、押出遺跡での建築材はトネリコが約半分、残り四分の一がヤナギを占めるという特異な樹種構成となっており、低湿地のど真ん中という立地を反映しているのではないかとのことでした。

▲企画展記念講演会　鈴木 三男 氏

押出の木製品の樹種はケンポナシが異常に多いとのこと、そして、樹皮袋は北海道やシベリアで利用が多いカバノキであり、縄紐も樹皮巻もカバノキとサクラ属ということでした。

つぎに、全国的な植物利用の実態ついて説明していただきました。

①編組製品の素材は樹皮やムクロジとイヌビワのへぎ材が使われ、根も使われた例があること。

②縄紐類の素材はシダ類の葉柄が大半で、他にヤマブドウの樹皮、マタタビ属や、ツヅラフジの蔓、カバノキ属やサクラ属の外樹皮、シナノキやニレ属の樹皮繊維、アサ、カラムシ、イラクサ科の繊維など実に多様であったこと。

③漆の利用は、縄文時代草創期の爪形文土器の時代まで溯ること。

④縄文人はムラサキシキブやイヌガヤの低木を育成管理していたこと。

そして、最後にムラの廻りには畑や、クリやウルシ林があり、その外側の二次林としての雑木林が「恵みの空間」として存在しており、二次林である「ふるさとの森」の成立は縄文時代に溯るとして、講演を締めくくられました。

第XI期　うきたむ学講座

今期の特集は『置賜の歴史と生活をさぐる』です。人々が生活の中で神仏を信仰していた風景、中世・置賜地方を拠点としていた伊達氏の歴史、生活の必需品である焼き物など…

今年も様々な視点から置賜の歴史を見て行きます。

【第1回】伊達時代の置賜

「伊達氏のふるさと梁川城」今野 賀章 氏

「伊達時代の米沢―舘山城を中心に―」宮田 直樹 氏

平成29年1月15日（日）13時～16時

【第2回】置賜の産業　焼き物編

「置賜の窯業」高橋 拓 氏

「江戸前期の地方窯業」渡辺 芳郎 氏

平成29年2月12日（日）13時～16時

【第3回】置賜の生活

「置賜の民俗」阿部 宇洋 氏

「川西町の石造物」伊藤 義隆 氏

平成29年3月5日（日）13時～16時

会場：考古資料館　（詳細はお問い合わせください）

催し物のご案内

今後の催し物です。ご来館をお待ちしております。

（詳細はお問い合わせください。）

◇ガラス玉をつくろう　12月3日(土)

◇編布（あんぎん）をつくろう　12月3日(土)

◇考古資料検討会　2月5日(日)

第十八期 考古学セミナー

平成28年9月25日／10月9日／10月23日（日）

今期は「縄文時代の植物利用」と題して、全三回開講し、今回の企画展をより深く理解する機会となりました。以下に内容をご紹介します。

「押出遺跡の植物利用」

水戸部 秀樹　氏

（山形県埋蔵文化財センター）

押出遺跡は、大谷地と呼ばれる湿地帯にあった遺跡で、通常であれば土中で腐ってしまう植物由来の遺物が、良好な状態で発見されました。特に、彩漆土器が完全に復元できる形で発見されています。

また、食用とされたクリやクルミも多く発見され、管理栽培されていたと考えられます。

「小山崎遺跡の植物利用」

大川 貴弘　氏

（遊佐町役場）

小山崎遺跡は、鳥海山麓に位置し、地下水が豊富な地で、植物に由来する遺物が良好な状態で発見されました。

遺跡からは、出根を抑制するため、先端が裂かれたコナラが出土しました。また、アサ・ヒエ・ゴボウ近似種などの種子や、豊富な木胎漆器なども発見されました。

「高瀬山遺跡の水場遺構と植物利用」

小林 圭一　氏

（山形県埋蔵文化財センター）

寒河江市の高瀬山遺跡では、縄文時代後・晩期の水場遺構が五基確認されました。湧水が豊富な地であり、水場の作業場であったと考えられます。

遺構の周囲からは、トチノキなどの種子が集中して発見され、アク抜きなどの種子の加工に関わる施設であったと想定されます。

「縄文時代の植生史と植物利用」

吉川 昌伸　氏

（古代の森研究舎）

東日本では、旧石器時代末には温帯性ないし亜寒帯針葉樹林が分布していましたが、縄文時代よりコナラ亜属やカバノキ属の落葉広葉樹を混生した植生に変化し、早期には落葉広葉樹からなる森林に変化しました。

押出遺跡の盛土遺構の杭には、周辺の湿地林や河畔林、山地の落葉広葉樹林の木が使われており、近場で調達が容易な木材を利用していたと考えられます。

「出土遺体にみる縄文時代の植物利用」

吉川 純子　氏

（古代の森研究舎）

出土する種実は、人間が介在しない自然のものも多く混在するため、堆積状況などの確認が必要です。

押出遺跡では、水域や湿地の植物とともに、クリが完形で炭化した状態で流路に堆積していました。また、大量に出土したオニグルミも人為的破砕痕が確認され、いずれも人為的に廃棄されたものと考えられます。

小山崎遺跡では先端処理されたコナラの集積や、利用痕のあるクルミ、カボチャに似た種子が見つかっています。

絶賛頒布中！「森と暮せば ～縄文人の植物利用～」

今年度開催の、第二十四回企画展「森と暮せば～縄文人の植物利用～」の展示図録です。

通常発掘されることの少ない木製品を通し、縄文人が身近な植物をどのように利用していたのか、豊かな森と縄文人の関わりを探ります。

展示遺物を全点収録。詳細は、当館までお問い合わせください。

目次

序　章　森と暮せば
第一章　住と木工
第二章　食料の獲得と加工
第三章　器と漆
第四章　装いと祈り

遺跡解説―1　小山崎遺跡
遺跡解説―2　押出遺跡

置賜史跡めぐり（42）

高畠の洞窟遺跡群

高畠町　●縄文時代草創期

高畠町北部に位置する大谷地周辺の丘陵地は、緑色凝灰岩（グリーンタフ）と呼ばれる凝灰岩で形成されています。丘陵地に露出する凝灰岩は、風雨による侵食などで洞窟や岩陰をつくり出し、日向洞窟・火箱岩洞窟・大立洞窟・一ノ沢洞窟の国指定史跡をはじめ、多くの洞窟遺跡・岩陰遺跡が残されています。

◇日向洞窟（国指定史跡）

日向洞窟は、白竜湖東側の丘陵の麓にあります。第Ⅰ洞窟、第Ⅱ洞窟の二つの洞窟と、第Ⅲ岩陰、第Ⅳ岩陰の二つの岩陰で構成され、中心となる第Ⅰ洞窟での縄文時代草創期の土器の発見は、縄文時代に「草創期」という時期区分が新たに設定されるきっかけともなりました。近年、洞窟西側の平地部分の発掘調査が進められ、草創期の遺構や遺物が広範囲に分布することが明らかになりつつあります。

◇火箱岩洞窟（国指定史跡）

火箱岩洞窟は、日向洞窟の北に位置する大師森山の中腹にある洞窟遺跡で、上洞と下洞の二つの洞窟で構成されています。

昭和三十六年から三十八年にかけて三回の発掘調査が行われ、その調査で上洞は縄文時代前期から古墳時代まで、下洞は縄文時代草創期から古墳時代までの遺跡であることがわかっています。

◇大立洞窟（国指定史跡）

大立洞窟は、日向洞窟の南に位置する大立山にあり、開口十三メートル、奥行七メートルの洞窟と、両脇の岩陰で構成される洞窟遺跡です。

昭和五十年から五十二年にかけて三回の発掘調査が行われ、縄文時代草創期から奈良・平安時代の遺跡であることが確認されました。

洞窟前の傾斜地からは、縄文時代草創期の微隆起線文土器などの土器が出土しました。

▲ 日向洞窟

◇一ノ沢洞窟（国指定史跡）

一ノ沢洞窟は、第Ⅰ岩陰、第Ⅱ岩陰、第Ⅲ岩陰から成る岩陰遺跡です。

昭和三十三年から三十六年にかけて三回の発掘調査が行われ、中心となる第Ⅰ岩陰前の傾斜地から、縄文時代草創期から奈良・平安時代にかけての遺物が大量に出土しました。

我が館の展示品（36）

押出遺跡出土のクリ・クルミ

縄文時代前期
●高畠町　押出遺跡

押出遺跡は今から約六千年前、屋代川と吉野川の合流点に近い、白竜湖からつづく低湿地に営まれた集落遺跡です。

遺跡からはクリ、クルミなどの他、大量の有機物の遺物が当時の原形を留めて出土しましたが、それは低湿地にあるこの遺跡が、水に浸かっていたからです。

また、それらの植物を原料として作られた炭化食品（縄文クッキー）も出土しており、当時の食生活を垣間見ることのできる貴重な資料として展示しています。

▲ 押出遺跡出土のクリ・クルミ

ベビーカーが寄贈されました

日本博物館協会が行う博物館利用推進事業の一環として、宝くじ協会の助成により、当館にベビーカーが寄贈されました。

館内見学の際ご利用を希望される方は、受付までお気軽にお申し付け下さい。